

## チェルノブイリ原発事故から40年 講演会「チェルノブイリと福島が私たちに問うもの」

5月23日(土) 開場1時 1時30分~4時30分 明治学院大学白金校舎 大教室

1986年4月26日、当時のソ連邦ウクライナ共和国のチェルノブイリ原子力発電所が大爆発し、莫大な放射性物質が飛散しました。欧州の40%が汚染され、事故による過剰死は16000人(世界保健機関WHO)から98万人(ネステレンコ、ヤブロコフらの調査)の間と推定されています。

特にベラルーシ、ウクライナ、およびロシア西部地域の汚染は深刻でした。高線量の外部被曝と汚染された作物や牛乳の摂取などによる内部被曝により罹病率が高まり、とりわけ小児甲状腺ガン、新生児先天異常をはじめ様々な病気が増えました。しかし国際原子力機関IAEAは当初事故の影響と認めず、対策の遅れで亡くなった子どもも多くいました。現地の医師の必死の訴えでようやく95年にIAEAも甲状腺ガンのみ放射能の影響と認めたのです。その子どもたちの治療は、日本からボランティアで駆け付けた菅谷昭医師をはじめとした日本の医師と現地の医師たちとの協力により行われました。

私たちはこの大事故から何を学ぶべきでしょうか。ウクライナの科学者シチェルバクはこう記しました。「巨大な技術システムが、文明に対して大きな脅威となり、人間にコントロールできなくなる可能性も増し続けている。…この事故の特徴は、何百万の住民、なかでも子どもたちが影響を受けたこと、長期にわたって土壌・水・大気が放射性物質により汚染されたこと、そして自然環境と生態系の不可逆的な変化である。チェルノブイリ—それは、決して忘れられてはならない、人類への永遠の教訓である。」

しかしその警告に耳を傾けなかった日本で2011年に福島第一原子力発電所の事故が起きてしまいました。そして事故当時子どもだった302名もが既に甲状腺ガン手術を受けています。

しかし政府も東電も原発事故が原因ではないと言いはり、さらに今、事故の収束の見通しもない中で次々に原発を再稼働させています。

チェルノブイリ事故から40年、福島事故から15年たちますが、大量に放出されたセシウム137(半減期30年)の放射能はチェルノブイリでもまだ4割が、福島では7割が残っています。今後100年以上、私たちはその危険性と向き合っていかなければならず、忘却は許されません。

そこで、数十年来原発の問題を訴え続けてきた小出裕章さん(元京都大学原子炉実験所助教)、ベラルーシで手術された医師の菅谷昭さん(前松本市長)、311甲状腺ガン裁判弁護団の柳原敏夫さん(市民が育てるチェルノブイリ法日本版の会)、チェルノブイリ被災地の子ども支援に取り組む佐々木真理チェルノブイリ子ども基金事務局長の話を通して問題の深刻さを理解し、今なすべきことを考えたいと思います。

【内容】①小出裕章「チェルノブイリ事故と福島が私たちに問うもの」、②菅谷昭「ベラルーシでの甲状腺がん治療の経験から福島の今を考える」、③柳原敏夫「311子ども甲状腺がん裁判で問われていること」、④佐々木真理(チェルノブイリ子ども基金)「現在も続く救援活動について」、⑤パネルディスカッション  
主催:チェルノブイリ子ども基金 共催:明治学院大学国際平和研究所 協賛:未来の福島子ども基金、市民が育てるチェルノブイリ法日本版の会  
会場 明治学院大学(東京メトロ南北線・都営地下鉄三田線 白金高輪駅または白金台駅下車 徒歩7分 使用教室は5月始めに子ども基金HP <https://ccfj.la.coocan.jp/>に掲載)  
資料代 800円 定員150名先着順(事前申し込みは受け付けません) 問い合わせ先 チェルノブイリ子ども基金 cherno1986@jcom.zaq.ne.jp